

<なぜ平塚が？>

■当時の平塚市は、人口約五万という小さな都市でした。したがって、米軍が戦略上の重要都市として、実際に空襲を行った都市（大都市7カ所、中小都市57カ所の計64都市）の中では、59番目の規模の都市でしかありません。しかし、規模は小さいながら、当時の平塚市には、第二海軍火薬廠をはじめ、横須賀海軍工廠造兵部平塚分工場、同造機部平塚分工場、第二海軍航空廠補給部平塚補給工場、日本国際航空工業、二荒航空工業、近江航空工業といった官民軍需工場があり、紛れもない軍需都市でした。

■軍都平塚が空襲目標に選ばれた理由は、米軍の「爆撃報告書」によると、平塚市が小工業地区であること、特に航空関連工業の重要地点であり、海軍兵器工場や航空技術開発の研究機関をもつこと、平塚～横浜～横須賀を結ぶ神奈川県的主要工業三角都市の西の拠点であること、BAKA機の生産に関与していることなどが、目標の重要性として指摘されています。

したがって、航空技術開発・研究・生産に係わっていたことが、目標とされた最大の理由になります。

<いつ爆撃は始まったか？>

■平塚を空襲した米軍はグアム島北飛行場を発進し、硫黄島、大島を経てほぼ真南から平塚市上空に進入、焼夷弾投下後、市内城島～秦野～松田～伊豆半島～石廊崎で海上に出て、再び硫黄島を経由、グアム島に帰還しています。

平塚空襲にあたる部隊は、第314航空団4部隊133機で、グアム基地を16日午後4時38分から5時45分までの間、1時間7分かけて飛び立っています。このほか、4機の特種電波攪乱専用機が出撃し、高射砲やレーダーと連動する探照灯に対して電波妨害を試みています。攻撃

機133機のうち12機は先導機といって主力部隊の先導を努め、目標に先行投弾し、後続機がその火災を目印に投弾する事になっていました。1番機が陸地を初見した時間は、午後11時12分、その20分後に初弾を投下します。その時刻は、11時32分でした。

<投下爆弾は何か？>

■第314航空団の4部隊は、1隊がAN-M47A2（小型油脂焼夷弾）を搭載、残り3隊がAN-M17A1（テルミット・マグネシウム焼夷弾）を搭載していました。M47及びM17は、集束弾と呼ばれ、M47は6発、M17は110発を束ねて落とす物で、目標上空5,000フィート（1,500m）で安全装置が外れるようにセットされていました。当時の日本ではこれら焼夷弾を「親子焼夷弾」と呼んでいます。これら焼夷弾の全搭載量は、1,201.7トン、このうち1,162.5トンが投下され、M47・M17合わせ447,716発が投下された事になります。この数を人口五万で割ると、一人あたり実に8.9発もの焼夷弾が落とされた事になります。

<そして焦土>

■米軍が事前の偵察で平塚の攻撃面積として見積もっていた広さは、2.35平方マイル（6平方m）でした。このうち、1.46平方マイル（3.7平方m）が市街地、0.89平方マイル（2.3平方m）が工業地区と見積もっています。このうち全市外地面積の57%（0.83平方マイル（2.1平方m））、全工業地区面積の23.4%（0.208平方マイル（0.5平方m））を破壊したと「爆撃報告書」は伝えています。

■この空襲による人的・物的被害は、県警調べで死者237名・重傷118名・軽傷150名、罹災戸数7,678戸となっていますが、実際の被害はこれを上回るものと推定されています。

（平塚の空襲と戦災を記録する会）

『平塚の空襲展』

寄贈品コーナー展示

6月17日～7月30日

特集『7.16 平塚大空襲』

証言に基づく平塚大空襲

■平塚の空襲と戦災を記録する会では、既に関の発足以来50名を越える市民の皆様から、平塚空襲の体験を聞き取り調査という形で集めています。そこで、聞き取り調査を通して、体験者からの平塚空襲の実際を記録してみましよう。

平塚空襲の予告はあったか？

■当時、市民の多くは、「平塚は空襲される」と考えていました。その根拠は、「火薬廠」があるからといったことでした。平塚空襲の予告に関する証言のうち、「平塚空襲の前日にアメリカ軍機により空襲を予告するビラが撒かれた」という証言がえられています。また、「今日(7/16)は平塚が空襲されるので、徴用先を定刻より早めに帰された」という証言もあります。

空襲警報と空襲の開始？

■空襲警報が7月16日の夜、正確に何時何分に出されたか記憶する人は大変少ないといえます。警報を記憶する人の証言では、一様に空襲警報とほぼ同時に空襲は開始されたといえます。当夜、東海道下り線を新鶴見駅から貨物列車を牽引(50両)していた機関士の証言によれば、「馬入橋を渡りかけた時、警報のサイレン(長さ5分間)を聞き、馬入橋を渡りきり平塚駅場内信号機(現神奈中スイミング付近)の見える所にさしかかった時、市内あちらこちらに照明弾が落とされ、街全体が真昼のように明るくなった」と証言することから、警報が終わるか終わらないうちに空襲が始まったことは確かなようです。

空襲の開始時刻？

■空襲開始時刻の記憶は、体験者によって、その開始時刻に「午後8時頃」という証言や「午後11時過ぎ」という証言まで、さまざまな時刻が記憶されています。

当時、火薬廠に勤務されていた人の証言では、「当時の火薬廠は、午前0時になると夜食の時間として休憩時間が与えられていたこと、そのため午後11時30分を過ぎてそろ

寄贈品コーナー展示 《平塚の空襲と戦災》

7月30日まで

そろ夜食の準備に入っていた」その時、警報と共に空襲が開始されたと記憶し、空襲開始時刻を「午後11時40分頃」と証言します。ところで、先の貨物列車は、16日23時25分、定刻5分遅れで茅ヶ崎駅を発車しています。平塚駅場内信号機手前で空襲が始まり、その時刻は、「23時32・33分頃」と言います。「現在、茅ヶ崎～平塚間は、電車で5分を予定し運行している」(平塚駅談)とありますから、茅ヶ崎駅を発車し7・8分の位置で、十分に平塚場内信号機を捉えることが出来たと考えられます。そして、この23時32分という時刻は、アメリカ軍機が平塚空襲の初弾投下時刻とピッタリ一致するのでした。

当時の市民は、就寝時、いざという時の備えとして、服をきたまま寝ている場合が多く空襲とわかった時は、ごく簡単な身支度で済むように習慣づけられています。空襲が始まると多くの方は、「飛び起きたという感じ」「ガタガタ膝が震えた」「とうとう空襲だ」と言うように、突然の空襲に、恐怖と諦めに似た感じを強く持ったようでした。多くの方は、一時的に各家々に作られている粗末な防空壕に避難しますが、激しさを増すに連れ、防空壕を抜け出し外の場所へと避難を開始しています。

避難の様子

■避難に際して、市民の多くは身の廻りの物を携帯し避難しています。しかし、「バケツ一つを手を持ち逃げた」という具合に、混乱の中、何一つ持たず避難した人も沢山ありました。最も多くの方が持ちだした物に、「布団」があります。この布団は、降り注ぐ焼夷弾から身を守るための物であり、この布団すら避難の途中で投げ出す人も沢山いたようです。避難場所は、海岸、相模川土手・花水川土手・天沼地区の田圃・浜岳地区の松林などに集中します。しかし、避難場所にも用捨なく焼夷弾は降り注ぎ、避難場所においても多くの人々の貴い人命が失われています。

(平塚の空襲と戦災を記録する会)